

ウ 病虫害防除法（グラジオラス）

（ア）赤斑病 *Curvularia gladioli*

（防除のねらい）

球茎や被害葉で越冬し、伝染源となる。25～30℃が病菌の発育適温である。高温多湿で発病しやすい。

（耕種的防除法）

- （1）連作を避ける。
- （2）被害茎葉は除去する。
- （3）無病種球を利用する。

（イ）首腐病 *Burkholderia gladioli pv. gladioli*

（防除のねらい）

アヤメ属植物を侵す細菌病である。主として汚染種球で伝染するが、発生地では被害植物残渣とともに土壌中に残存し、伝染源となる。多湿条件で多発しやすく、機械的傷害で発病が助長される。

（耕種的防除法）

- （1）排水を良くする。
- （2）発病株は土とともに除去する。
- （3）発病地では連作しない。
- （4）無病種球を利用する。

（ウ）硬化病 *Septoria gladioli*

（防除のねらい）

被害植物残渣とともに土壌中に残存し伝染源となるが、汚染種球でも伝染する。多湿条件での球根貯蔵や連作は発病を助長する。

（耕種的防除法）

- （1）貯蔵中の多湿を避ける。
- （2）無病種球を利用する。
- （3）病株は除去・焼却する。
- （4）発病地では連作しない。

（エ）乾腐病 *Fusarium oxysporum*

（防除のねらい）

球茎のみに発生し、汚染種球で伝染するが、被害植物残渣が土壌中に残存し伝染源にもなる。球根消毒は必ず行い、発病のおそれがあれば、土壌消毒を行う。

（耕種的防除法）

- （1）病株は除去・焼却する。
- （2）発病地では連作しない。
- （3）無病種球を利用する。

（オ）角斑病 *Xanthomonas campestris pv. gummisudans*

（防除のねらい）

細菌性病害で土壌から下葉傷口や気孔から体内に侵入する。高温多湿条件で多発しやすく窒素過多や茎葉に機械的損傷を受けると発生が助長される。

（耕種的防除法）

- （1）連作を避ける。
- （2）無病種球を利用する。
- （3）マルチ栽培又は敷わらをする。
- （4）石灰を十分に施し、適正施肥とする。

(カ) モザイク病 BYMV, CMV

(防除のねらい)

病原ウイルスはインゲンマメ黄斑モザイクウイルス (BYMV) , キュウリモザイクウイルス (CMV) の2種類が主体で、いずれも保毒球根が伝染源となるが、アブラムシ類によっても伝染し、汁液によっても容易に伝染する。

(耕種的防除法)

- (1) 無病株を利用する。
- (2) 発病株を除去する。

(キ) アザミウマ類

(防除のねらい)

県本土ではダイズウスイロアザミウマ、沖永良部では本種とグラジオラスアザミウマが発生する。周辺の雑草や作物にも寄生しているので、合わせて対策をとる。

(化学的防除法の注意事項)

グラジオラスアザミウマ対策として、10分間球根を浸漬する。

(ク) シロイチモジヨトウ

(防除のねらい)

成虫は発芽直後から産卵し、ふ化幼虫は糸を吐き、その中で食害するが、成長すると分散し、葉・花を食害する。被害は8～10月にかけて多い。

(ケ) ハスモンヨトウ

(防除のねらい)

8～10月に発生が多く、成虫は葉身に産卵する。ふ化幼虫は集団で表皮を残して加害し、葉は白変する。幼虫が成長すると分散し、葉・花を加害するようになる。

(コ) ハダニ類

(防除のねらい)

カンザワハダニが主体で球根養成株では早期枯れ上がりの原因になる。

(サ) ネダニ

(防除のねらい)

ユリの項参照。

(シ) センチュウ類

(防除のねらい)

球茎や木子にも寄生する。サツマイモネコブセンチュウ、ミナミネグサレセンチュウが主に寄生する。ネコブセンチュウは多くの作物に寄生するので、前作に被害のあったほ場に栽培するときは土壤消毒を徹底する。